ガ○ダムキャラ18禁CG集
ダブルオーユーシー
VOLVOX:キザキ
ZEON
BITCH
WHORE

（兵士A）
後味の悪い任務でした、公式には乗り合わせたインダストリアルセブンの避難民による暴行、という発表になると思います。まあ撮影したディスクが公表されればの話ですが。どこから出た命令なのかは知りませんけどね。
本部としては交渉材料は多いほうがいいって考えなんでしょう。政治屋の考える事は私にはわかりません。
部下は乗り気でしたよ。元々ジオンに嫌悪感のある者や、素行に問題のある兵士で編成した即席のチームでしたから。彼らが事故を起こさないよう…あやまって捕虜を殺してしまわないよう監視するのが私の任務でした。
恥を知れ!!
これが軍人のすることか!?

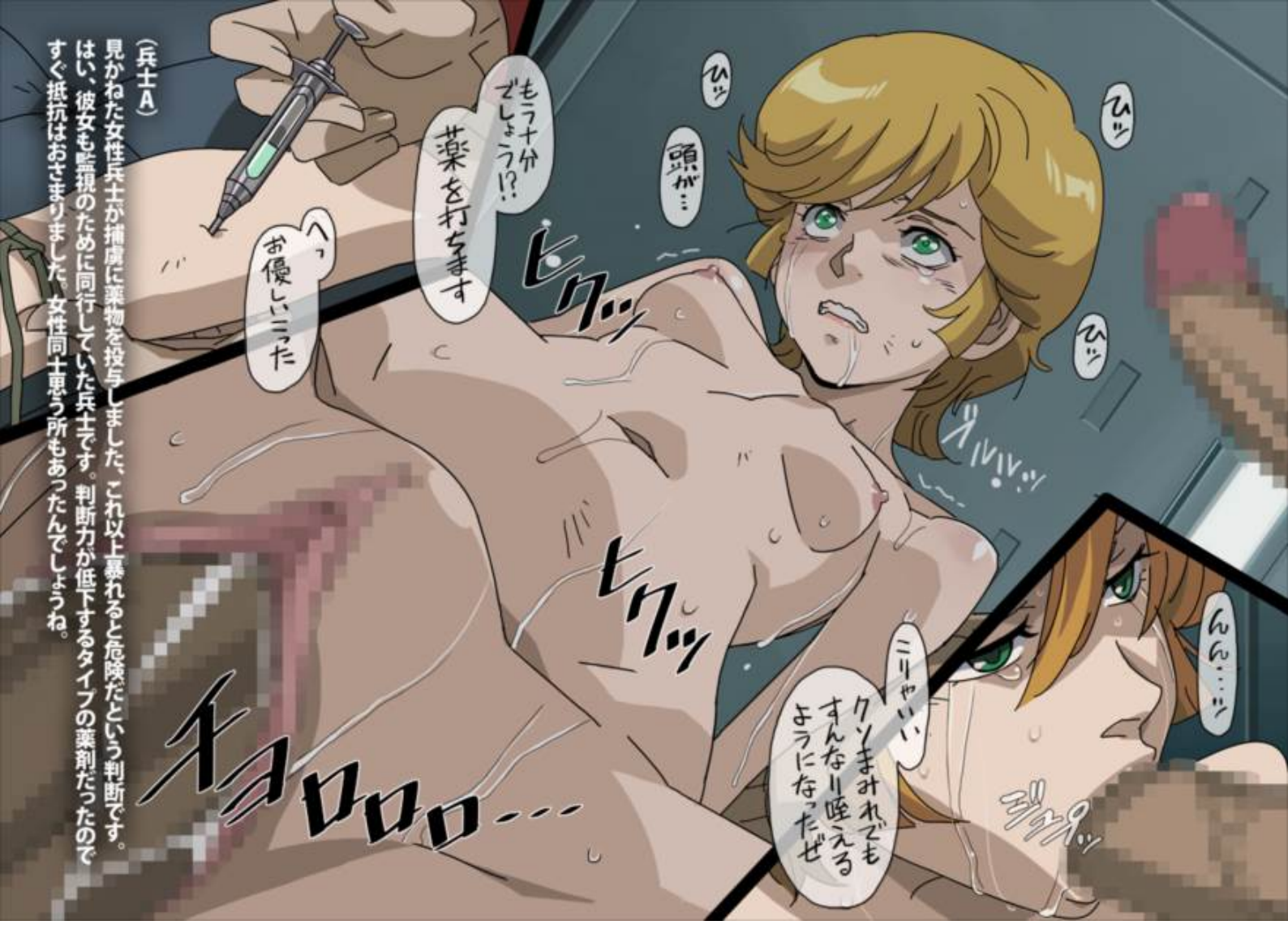
（兵士A）
ミネバ・ザビですか？まだ若いのに威厳がありましたよ。最初はすいぶん抵抗しましたが
[redacted]と軍人ですからね。無駄だとわかるとすぐ大人しくなりました。さすがというか
何というか、表情ひとつ変えず気丈にふるまってましたよ。
ヒュー
見ろよコイツ
やっぱり処女だぜ
賭けは
俺の勝ちだな
負けた分は体で
払ってもらうぜ
お姫様
ドンッ
ドンッ
ブッシュッ
ふッ
ふッ
ふッ
ニチャッ
ニチャッ
ニッ…ッ
チッ

（兵士B）
前の戦争じゃ捕虜でよくやったよ。気の強そうな奴を一人だけ縛り上げてみんなで回すのさ
大抵のジオン女は「殺せ！」ってわめくんだがお姫様は黙ってこっちを睨んでた、しびれたね
恨めしそうな顔が最高だったよ、思い出しただけでもイッちまいそうになる。

（兵士C）
俺はあのすました顔が気に入らなかったからケツにぶち込んでやったのさ。そりゃ驚いてたよ、最初は何をされてるのかもわからないって顔してた。

で、ヒックスが『ジオンのケツの具合はどうだ？』って聞くもんだから『硬てぇ！』って言ってやったんだ。そしたら『俺が挿れるまでに柔らかくしとけ』だってよ、あいつ酔っ払ってたんだ。お姫様？ああ痛がってたよ、この世の終わりみたいな顔してヒィヒィ言ってた。あんたにも見せたかったな。

（兵士C）
それからはみんなケツに挿れたがって大変だったんだぜ。わざと痛がらせて楽しんでたら泣き出しちまってさ、ジオンのお姫様もとうとう五人目で音を上げたってわけさ。あれ六人目だったかな？まあいいや、それであんまり暴れるからぶん殴って大人しくさせたんだよ。



（兵士A）
見かねた女性兵士が捕虜に薬物を投与しました、これ以上暴れると危険だという判断です。
はい、彼女も監視のために同行していた兵士です。判断力が低下するタイプの薬剤だったので
すぐ抵抗はおさまりました、女性同士恵う所もあったんでしょうね。

（兵士A）
それからの事はミネバ・ザビ本人は覚えていないでしょうが、その方が幸運だったのかもしれません。ずいぶん長い時間いたぶられましたから。排泄物と熱気でひどい臭いでしたよ。途中気分が悪くなった女性兵士には私から退出の許可を出しました。酒気でも帯びていないとまともではいられない空間だったんです。

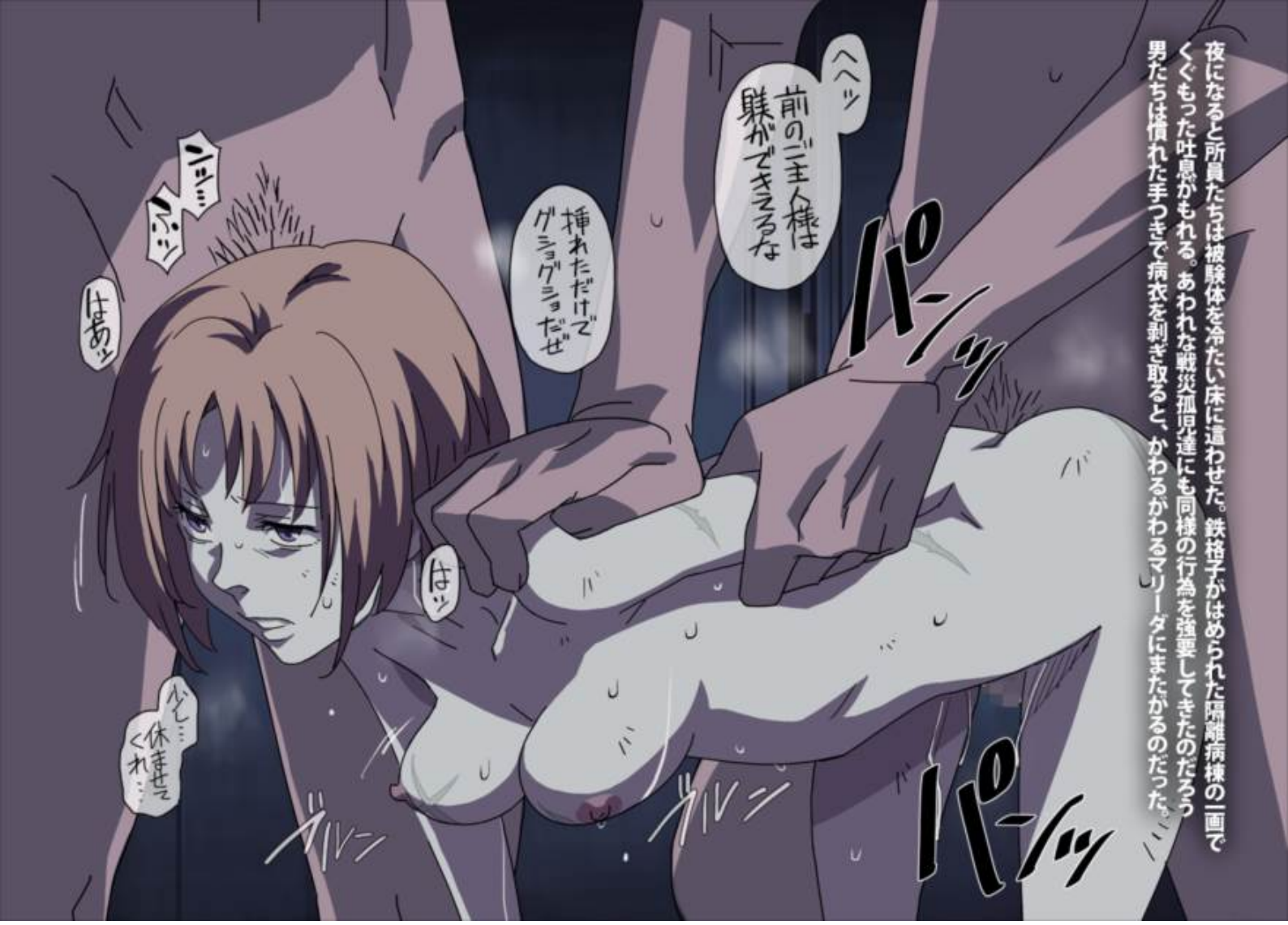
（兵士C）
何だあんたあのディスク見たのか、もう闇ルートじゃ出回ってるんだな。どうだった？よくできてたろ、みんなケツにぱっか出すもんだから最後は噴水みたいに吹き出してさ笑っちまったよ、お姫様も薬がキマってそうとうブリってた、まるで雌犬さ。ザビ家の後継だろうが何だろうがああなっちゃもうおしまいだよ。

手術台に縛り付けられた体からは蒸気が立ち上り、失禁を繰り返した又の間からは異臭がたちこめていた。
「十八時間負荷をかけ続けていますが、まだ意識ははっきりしています」
「すばらしい、驚異的な精神力だ」
理想的なモルモットを前に研究者達は色めき立つ。

戦争が終わってからというもの、提供される検体の数は激減し生体実験は縮小の一途をたどっている。そんな中オーガスタニュータイプ研究所に搬送されてきたマリーダ・クルスは研究者達にとってかっこうの研究材料といえた。

マリーダの洗脳は苦痛を与え疲弊させるという最も原始的な方法で進められる。
「新型兵器のパイロットにするために別人に作り変えろだなんて、無茶な注文してくれるよ」
瞳孔反応を確かめた所員が合図すると、マリーダの体は機械じかけのように跳ね上がる。
絶叫とともにその瞳からは光が失われ、失神するまで悲鳴が止むことは無かった。

夜になると所員たちは被験体を冷たい床に這わせた。鉄格子がはめられた隔離病棟の一画でくぐもった吐息がもれる。あわれな戦災孤児達にも同様の行為を強要してきたのだろう。男たちは慣れた手つきで病衣を剥ぎ取ると、かわるがわるマリーダにまたがるのだった。


ヘヘッ
前のご主人様は
躾ができてるな
挿れただけで
グショグショだぜ
ハッ
ハッ
ハッ

「良い仕上がり具合だ、これなら刷り込みも成功するだろう」
男達はたしかめるようにマリーダの体を撫で回す。疲弊しきったマリーダの精神は曖昧であり、かきまわされた脳と体は自分がおかれた状況も認識できないほど憔悴していた。

「明日再調整に立ち会うお偉いさんはそうとう無茶する人らしいぜ、いじり回してぶっ壊されなきゃいいけどな」
男たちはぐったりとしたマリーダの体を執拗に責め続け、その嗚咽は暗闇に飲み込まれていくのだった。

「ねえ聞いてる？続きしてあげるから本当に約束守ってよね」
ミコットはペニスから口をはなすと若い将校を見上げ眉をひそめた。
「わかってるってボーイフレンドの事がわかったらすぐに知らせてやるからさ」
「違うわよ　バナージはそんなのじゃ…」

バナージ・リ○クスが、ジオン残党に鹵獲されてから数日、ネェル・アーガマでは救出作戦の準備が進められていた。軍用機を無断で持ちだした少年は無事救出されたとしても軍警察に逮捕され投獄されてしまう。少しでも刑を軽くするために地位のある将校の口添えが必要なのだ。民間人の少女にはこの程度の事しかできなかった。

「痛っ、もっとやさしくしてよ」
「何だ意外と遊んでないんだな、潤滑ゼリーでも塗ってやろうか?」
硬いコンソールに押し倒され、股を開いた自分の姿はまるで娼婦のようだと思った。
ツンと突き出した乳房をゆらし身をよじる少女に男はのしかかる。
はぁッ
待っ…て
まだ…ッ動かないで
はーっ
はーっ
ゆっくりよ
ゆっくり…ッ
ぶッ
ぐぐッ
ぐぐッ
力抜けって
まだ半分も入ってないぞ
「太い…っ…入って…くるッ」
「ずいぶんと狭いな、食いちぎられそうだ」
メリメリと腹を押し広げる圧迫感に呼吸を荒げミコットは頭を振った。

合成樹脂の三枚のパネルに守られた窓の外、モビルスーツデッキから見えるようミコットを立たせると男は後ろから執拗に突き上げた。

「見られてると思うと興奮するだろ」

「あんッ…変態…んッ…いいからはやくイッちゃってよ」

悪態をつくミコットの声に甘い息がまじる。

ネェル・アーガマ クレーン操作室はビル五階分に相当する高さとはいえこちらに気付く整備兵もいるだろう。ほとんど顔見知りのいない軍艦だったが、見られているかもしれない背徳感に少女の先端は固く尖っていた。

「はぁ、はぁ、はぁぁ――――…あああぁぁっ…もう…いやぁ」
後ろから子宮口をノックされ背筋にゾクゾクと快感が走る。力なくコンソールにつっぷしてしまうミコットにもおかまいなしに腰は振られ続けた。

「くっ…出すぞ」
限界まで勃起した肉棒が、生々しく鼓動を早める。
「ひっ…ダメっ、中はっ…中はダメ！」
四つん這いになった腰を突き上げられ、絶頂に達した瞬間
「ああ…そんなぁ…出てる……中にぃ」
ドクドクと熱い精液を子宮に注ぎ込まれ、少女はぐったりと倒れこんだ。